1　五臓

1．総論（肺・心・肝・脾・腎）

●五臓総論

①五臓は，肝・心・脾・肺・腎の総称である。
②五臓は，精を蔵し，各種の精神活動を担う実質器官である。
③五臓はそれぞれ独自の生理機能をもっているが，同時に『霊枢』邪客篇に「心なる者は五蔵六府の大主なり，精神の舎る所なり」とあるように，心が他の４臓に対し主宰的作用をもつとされる。
④五臓の間の各種の生理機能活動は，生我・我生・剋我・我剋の相生相剋関係のうえに相互に協調することで平衡が保たれているとされる。この考え方は，おもに陰陽五行学説の理論にもとづいたものであるが，五臓間の関係では実際の生理と病理の分析が優先されるべきである。
⑤五臓と五行の配当は，肝木，心火，脾土，肺金，腎水である。
⑥五臓はすべて体幹部に存在する。高低順では膈上の上焦に肺・心，膈下臍上の中焦に肝・脾，臍下の下焦に腎が位置している。肝を下焦とする説があるが，肝の位置は中焦で脾より高位である。
⑦五臓は，それぞれ特定の六腑と経絡を通じ，また生理機能において親和性をもつ。具体的には，肝と胆，心と小腸，脾と胃，肺と大腸，腎と膀胱である。

参考資料

所謂五藏者．藏精氣而不寫也．故滿而不能實．

（『素問』五蔵別論第十一）

【書き下し文】

所謂（いわゆる）五蔵なる者は，精気を蔵して瀉さざるなり。故に満ちて実すること能わず。

【現代語訳】

いわゆる五臓とは，精気を貯蔵して，外にその精気を排出することはない。五臓には常に精気が充満しており，六腑のように水穀で充実しているようなことはない。

五藏者．所以藏精神血氣魂魄者也．
（『霊枢』本蔵第四十七）

【書き下し文】

五蔵なる者は，精神，血気，魂魄を蔵する所以（ゆえん）の者なり。

【現代語訳】

五臓は精・神・血・気・魂・魄を貯蔵するものである。

蓋人身之所守，莫重于五臓。
（『医原』望病須察神気論）

【書き下し文】

蓋（けだ）し人身の守る所，五臓より重きはなし。

【現代語訳】

人体において守るべき一番大事な組織は五臓である。

2．各論

1　肺

●概略

①肺は胸腔にあり，左右で一対。肺は体幹の五臓六腑のなかで一番高い位置にあるので，「華蓋（かがい）」（天蓋）と呼ばれる。
②蜂の巣のような形態であり，下に透竅がない。
③肺は上は喉嚨（こうろう）（喉）に通じ，外は皮毛に繋がり，鼻に開竅する。
④鞴（ふいご）のように自身を膨らませたり縮ませたりさせて，宣発（肺気の上向性・外向性の作用）と粛降（肺気の下行性・内向性の作用）を交互に作り出す。
⑤五行では金に属し，五神では魄を蔵す。五志では憂，五味は辛，五液は涕（てい）（鼻水）。
⑥手太陰肺経と手陽明大腸経が肺と大腸に属絡していることで，肺と大腸は表裏となっている。
⑦肺は鼻・肛門・皮膚と関連しており，これらの諸器官を通じて外界と繋がっている。したがって寒熱に弱く外邪の影響を受けやすいので，「嬌臓（きょうぞう）」と呼ばれている。鼻・肛門・皮膚については，後述の「第Ⅱ部　組織・器官」のそれぞれの項を参照のこと。

●機能

肺の機能は主気（呼吸の気，一身の気）と通調水道を主ることである。

1）気を主る（主気）

（1）呼吸の気を主る

肺を縮ませて宣発の力を生じさせ呼気を行い，肺を膨らませて粛降の力を生じさせ吸気を行う。

『内経』には明確に肺が呼吸を担っているとは記されていない。「天気は肺に通じ，地気は嗌（あい）（咽と同義）に通ず」（『素問』陰陽応象大論篇）といっているだけである。呼吸に関しては，『霊枢』邪客篇に「故に宗気は胸中に積み，喉嚨に出で，以て心脈を貫き，而（しか）して呼吸を行う」とあるように，「宗気」が担うとされる。肺の直接的関与の記載は後世で，たとえば『類経図翼』（明代，張介賓）が肺について「虚すること蜂窠の如く，下に透竅無し。之を吸えば則ち満ち，之を呼（は）けば則ち虚す。一呼一吸，消息自ら然り」と形容している。

（2）一身の気を主る

呼吸に連動して，①宗気の生成，②全身の気機の調整，③心を助けて血を巡らせることの３方面と関係している。これを「肺は治節を主る」という。治は管理や統治，節は制御の意

味なので，全身の気を制御しているという意味になる。

2）水道の通調を主る（主通調水道）

通は疏通，調は調節，水道は水液の輸布と排泄の道路の意味。『素問』経脈別論篇にみられるように，肺の宣発粛降作用によって，全身に水液は運ばれる。また，全身に送られた津液は，各組織器官を滋養し，五液や呼気によって排出されて残った津液は肺の粛降と腎の納気の作用によって，下焦に集められる。肺の宣発粛降作用は水液の輸布と排泄に影響するので，その異変は汗や尿の排泄異常や水腫・痰飲などと関連する。

●病症

肺のおもな病症は，咳嗽・呼吸障害（息切れ・喘息）・喀痰（咳血を含める）・発声障害（かすれ声や声が出ない）・水腫（むくみ）など。

参考資料

●概略

肺者，相傅之官，治節出焉。其形四垂，附着于脊之第三椎，中有二十四空，行列分布，以行諸蔵之気，為蔵之長，為心之蓋。是経常多気少血，其合皮也，其栄毛也，開竅于鼻。難経曰：肺重三斤三両，六葉両耳，凡八葉，主藏魄。華元化曰：肺者生気之原，乃五蔵之華蓋。肺葉白瑩，謂為華蓋，以覆諸蔵，虚如蜂窠，下無透竅，吸之則満，呼之則虚，一呼一吸，消息自然，司清濁之運化，為人身之橐龠。

（『類経図翼』三巻　経絡一）

【書き下し文】

肺は相傅（そうふ）の官①，治節（ちせつ）②焉（これ）より出づ。其の形四垂，脊の第三椎に附着す。中に二十四の空有り，行列して分布し，以て諸蔵の気を行（めぐ）らす。蔵の長と為し，心の蓋と為す。是の経，常に多気少血。其の合は皮なり。其の栄は毛なり。鼻に開竅す。難経曰く「肺は重さ三斤三両，六葉両耳，凡（およ）そ八葉，魄を蔵することを主る」。華元化③曰く「肺なる者，生気の源，乃（すなわ）ち五蔵の華蓋（かがい）④」。肺葉は白瑩（はくえい）⑤，謂いて華蓋と為し，以て諸蔵を覆う。虚すること蜂窠の如く，下に透竅無し。之を吸えば則ち満ち，之を呼（は）けば則ち虚す。一呼一吸，消息⑥自ら然り。清濁の運化※を司り，人身の橐龠（たくやく）⑦と為す。

【語釈】
①相傅(そうふ)の官――宰相の意。
②治節(ちせつ)――全身の気を統御すること。
③華元化――華佗。
④華蓋(かがい)――天子を覆う天蓋。
⑤白瑩(はくえい)――白く光ること。
⑥消息――消は無くなる，息は生まれるの意。
⑦橐籥(たくやく)――ふいごの意。

【現代語訳】
肺は宰相の役割を担い，全身の気の調整を担っている。その形状は４つに垂れており，脊椎の第３胸椎に附着している。中に24の空竅があって，行列して分布し，それによって諸臓の気を行(めぐ)らせている。肺は臓の長であり，心の蓋となっている。肺経は常に多気少血である。肺は皮に配合しており，その栄華は毫毛に現れる。肺は鼻に開竅している。『難経』は「肺は重さが３斤３両，６葉と両耳とで，全部で８葉に分かれている。五神の魄を蔵している」という。また，華佗の『中蔵経』では次のようにいう。「肺は生命の気の本源であり，五臓の天蓋である」と。肺葉は白く光っていて，華蓋といい，諸々の臓腑を覆っている。蜂の窠のように空っぽで下に通じる孔がない。息を吸えば膨らみ，息を吐けば空になる。一呼すれば一吸する形で呼吸は自然に行われている。吸気と呼気の運動を担っており，人身のふいごとなっている。
※清濁の運化――普通，脾の作用において用いられる語。その場合，「清濁」は「水穀の精微」と「糟粕」，または「水穀の精気」と「水穀の悍気」を指す。「運化」の「運」は運輸，「化」は消化・吸収を意味する。

天氣通於肺．地氣通於嗌． （『素問』陰陽応象大論第五）

【書き下し文】
天気は肺に通じ．地気は嗌(あい)①に通ず。

【語釈】
①嗌(あい)――咽と同義。

【現代語訳】
天の清気は肺に通じ，地の水穀の気は咽に通じる。